

新約聖書概観

参考資料:新聖書注解、新聖書辞典、チェーン式聖書、聖書の概説、新約聖書入門、新約聖書べんり帖、他

1. 新約聖書

神は、旧新約聖書66巻を誤りない神のことばとして人類に与え、神ご自身と神のみこころを啓示してくださいました。旧約聖書39巻は、神の啓示の前半部分です。天地創造から紀元前400年頃までに起こった神の救いの計画上重要な出来事とその意味を記しています。旧約とは古い契約という意味で、人は律法を守ることによって、神の前に義と認められるという契約です。(出エ24:7, 8)

旧約聖書完成後、新約聖書の時代までの約400年間は、神の啓示はありませんでした。この時代を中間時代と言います。

新約聖書27巻は、神の啓示の後半です。救い主の降誕から世の終りまでのことについて記しています。新約とは、新しい契約の意味で、人はキリストを信じる信仰によって義と認められるという契約です。(ヘブル8:13, 9:15) アウグスチヌスは、「新約聖書は旧約聖書の中に隠されており、旧約聖書は新約聖書によって明らかにされる。」と言いました。新約聖書を理解する時に旧約聖書の本当の意味を知ることができます。

2. 新約聖書の構成

歴 史 5	I テサロニケー信仰の励まし
福音書:キリストの生涯	II テサロニケー主の日についての教え
マタイ王としてのイエス	I テモテー牧会についての教え
マルコしもべとしてのイエス	II テモテー牧会者への励まし
ルカ一人としてのイエス	テトス牧会と教会形成
ヨハネ神としてのイエス	ピレモン赦しと和解
教会の歴史	その他の手紙8
使徒の働きー教会の誕生と成長	ヘブルー信仰の成熟
	ヤコブーみことばの実行
書 簡21	I ペテロー信仰の試練
パウロの手紙13	II ペテロー恵みと知識における成長
ローマー義認と聖化	I ヨハネー交わりの中の喜び
I コリントー教会の諸問題の解決	II ヨハネー偽教師に対する警告
II コリントー使徒としての勧め	III ヨハネーもてなす喜び
ガラテヤー信仰義認	ユダー信仰を守る戦い
エペソー神の救いの計画	
ピリピー喜びの手紙	預 言 1
コロサイーキリストの卓越性	ヨハネの黙示録ー未来に対する啓示

3. 福音書

四福音書は新約聖書27巻中15%しか占めていませんが、ページ数では総ページ数の約45%を占めています。福音書は、イエス・キリストの生涯が記されています。そして、イエスがキリスト(救い主)であることが証しされ、人々がイエスを救い主と信じて救われることを目的として書かれています。四福音書は、違った角度から描いた同じ情景の4枚の絵と考えることができます。4つの作品が統合された時、1つの情景は4つの次元を持つことになり、1つの観点からは見ることはできないものとなります。

4人の福音書記者は、それぞれの自分の主題を裏付けるしるしや教えや状況を選択しました。マタイはイエスをユダヤ人の王として示し、マルコは完全なしもべとして表しました。また、ルカはイエスを完全な人間として表し、ヨハネは完全な神として描きました。四福音書を通して、私達はイエスが旧約聖書に預言された救い主であることを知り、神であるお方が人となり、しもべとなって世の罪を贖うために十字架で死に、よみがえられた救い主であることを知ることができるのです。(ヨハネ20:30, 31)

マタイの福音書

1. 著者：マタイ（神の賜物）

マタイ 9：9 では、マタイの名が記されているのに対し、マルコ 2:14, ルカ 5:27 ではレビの名が使われています。また、金銭問題に関する記事が細かに記されています。

2. 執筆年代：60年代

3. 執筆場所：パレスチナのどこか

4. 執筆事情：古代の教会史家エウセビオスによれば、ユダヤ人伝道をしていたマタイが、異邦人伝道に向かう前に、不在を補うためにこの書を書きました。

5. 特色

①旧約の成就：この福音書は、直接的にはユダヤ人に向けて書かれました。そのため、旧約聖書を多く引用し、イエスが旧約の預言の成就としてのメシヤであることを強調しています。「主が預言者を通して言われたことが成就するためであった。」との定形句をたびたび使っています。1:22, 2:5, 15, 17, 23…。イエスの系図から始まるこの福音書は、旧約と新約を結ぶ自然な橋渡しとなっています。

②福音の普遍性：ユダヤ的色彩がある一方で、福音の普遍性が示されています。東方の博士による幼子イエスの礼拝 2：1、エジプトがイエスの逃れの場合 2：13、あらゆる国の人々に対する大宣教命令 28：19

③イエスの教え：イエスの教えが非常に強調されています。この福音書全体が5大説教を軸として書かれており、福音書の4割を説教が占めています。各説教は、「…語り終えられ」という定形表現で締めくくられています。7:28, 11:1, 13:53, 19:1, 26:1

④教会の教え：「教会」ということばは、マタイだけに出てきます。16:18, 18:17

⑤王としてのイエス：マタイの福音書には、「王としてのイエス」という一貫したテーマがあり、「王の福音書」ともよばれます。

ダビデ王の子孫としてのイエス 1：1、ダビデの子としての称号 8回、東方の博士たちの質問「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおいでになりますか。」 2：2、栄光の王としての再臨 25：31、ピラトの質問とイエスの答え「あなたは、ユダヤ人の王ですか。」「そのとうりです。」 27：11、十字架上の罪状書き「これはユダヤ人の王である。」 27：37、王の王イエス「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。」 28：18

6. 梗概

- ①イエスの誕生と宣教開始（1：1-4：25）
- ②山上の説教—第1の説教（5：1-7：29）
- ③イエスの権威（8：1-9：38）
- ④12弟子への説教—第2の説教（10：1-11：1）
- ⑤イエスへの拒絶反応（11：2-12：50）
- ⑥天の御国の7つのたとえ—第3の説教（13：1-52）
- ⑦イエスの受難準備（13：53-17：27）
- ⑧天の御国の民—第4の説教（18：1-35）
- ⑨イエスの受難行動（19：1-23：39）
- ⑩終末の説教—第5の説教（24:1-25：46）
- ⑪イエスの十字架（26：1-27：66）
- ⑫イエスの復活（28：1-20）

マルコの福音書

1. 著者：マルコ（ギリシャ語名…金槌、ヘブル語名：ヨハネ…主は恵み深い）

マルコの母マリヤの家は、エルサレムの教会の集会のために使われていました。使徒 12：12 マルコは、いとこバルナバとパウロと一緒に第1次伝道旅行に行きましたが、途中でマルコ一人が帰ってしまいました。このことが原因で、バルナバとパウロは激しく反目し、パウロはシラスを連れて第2次伝道旅行に、バルナバはマルコを連れてキプロス伝道に行きました。使徒 15：39 10年後、マルコはローマの獄中にいるパウロの元において、パウロの同労者となっていました。ピレモン 24 また、マルコはペテロから「私の子」と呼ばれる親しい関係を持ち、ペテロの伝道を助けたと考えられます。I ペテロ 5：13

2. 執筆年代：50年代

3. 執筆場所：ローマ、ガラテヤ、アンテオケなど

4. 執筆事情：2世紀の教父たちのよれば、マルコはペテロの通訳者として働き、異邦人に福音を伝えるためにペテロの語ったことを正確に書き記し、福音書としてまとめたと言われています。

5. 特色

①異邦人読者への配慮：この福音書は、直接的には異邦人に向けて書かれました。そのため、旧約聖書の成就を示す引用は 1:2, 3 の1回だけです。また、イエスの系図は省略され、ヘブル語やアラム語の言葉はギリシャ語に訳して説明しています。3:17、5:41、7:11、34…

②簡潔さ：文体が単純で簡潔です。「そして」「すると」、「すぐに」（42回）を用いて、早いテンポで話が展開していきます。1:42、2:12…

③行動的：イエスの行動をいきいきと記す一方、イエスの説教やことばは短く書かれています。（例：マタイ5-7章の山上の説教は、マルコでは全く触れていません。）

④率直さ：イエスの弟子や家族の無理解や不信仰を率直に述べています。3:21, 4:13…

⑤しもべとしてのイエス：マルコはイエスの行動を多く記述して、イエスが地上においてしもべとして人々に仕えられたこと、そして、苦難のしもべとしてのいのちをささげられたことを証しました。10:45

⑥末尾の補足：16：9以降の文章は有力な写本にはありません。このため、現在では16：9以降の文章は後からの追加文だと多くの学者が考えています。この福音書が16：8で初めから完結していたと考える学者もいますが、何らかの理由で未完で終わったか、或いは失われたとも考えられています。16：9以降を読む場合は、他の聖書箇所とよく比べて読むこと、また、この箇所から独自の教理を作らないことが大切です。

6. 梗概

①イエスのガリラヤ伝道（1～9章）

②エルサレムへの途上（10章）

③エルサレムでの活動、受難、復活（11～16章）

ルカの福音書

1. 著者：ルカ（光）

ルカは医者であり、パウロの同労者として、第2次伝道旅行からパウロと行動を共にし、パウロの殉教直前まで共にいました。（コロサイ4：14、ピレモン24、Ⅱテモテ4：11）ルカは、ルカの福音書と使徒の働きを書いた唯一の異邦人聖書著者です。

2. 執筆年代：①57～58年、②59～60年

3. 執筆場所：①カイザリヤ、②ローマ

ルカは、パウロがカイザリヤまたはローマでの幽閉の時期に、資料を綿密に調べ、よく準備して本書を書いたと考えられています。

4. 執筆事情：ルカは、パウロと共に異邦人伝道に携る中で、異邦人の伝道と信仰教育のために福音書を書く必要を覚え、資料を集め綿密に調べて、テオピロに献上する形を取って、本書を書きました。テオピロはこの福音書を書くためのスポンサーであったのではないかと考えられます。

5. 特色

①包括的：ルカは、バプテスマのヨハネの誕生から、イエスの少年時代、昇天に至るまで、イエスの生涯を順序立てて、最も包括的に描きました。1：1－4

②救いの強調：「救い」「救い主」のことばを8回用い、さらに、キリストの救いが「今」「今日」実現したことを強調しています。2：11，29，30，19：9

③社会的に疎外されている人々に対する関心：女性（43回、7：11）、子供（7：12…）、貧しい人（2：8－）、サマリヤ人（10：33，34）、取税人（19：2－）放蕩息子（15：11－）、強盗（23：39－）

④祈り：9回のイエスの祈りの記録の内、7回がルカ独自のものです。3：21，5：16…）イエスは、地上にあっては人として、父なる神にいつも祈って歩まれました。

⑤聖霊の働き：聖霊の著しい働きが福音書に記されると共に、続編の使徒の働きへとつながっています。1：15，35，41…、24：49

⑥伝道：ルカは、イエスご自身が伝道されたと共に、弟子達がイエスの証人として伝道に遣わされることを記しました。19：10，24：46－48

⑦賛美と喜び：本書には、イエスの降誕における4つの賛美の歌が記されています。また、喜びが満ちています。2：10，24：52，53

6. 梗概

①イエスの出現 1～3章

②ガリラヤ伝道 4～8章

③ペレヤ伝道、弟子訓練 9～18章

④エルサレムでの活動、受難、復活 19～24章

ヨハネの福音書

1. 著者：ヨハネ（主は恵み深い）

著者は自らを「イエスが愛された弟子」と呼んでいます。21：20，24 イエスが特に愛された3人の弟子の内、ペテロは名前が福音書に登場し、ヤコブはすでに殉教していることを考えると、著者はヨハネであると考えられます。教父達も著者がヨハネであると記しています。

2. 執筆年代：85～90年頃

3. 執筆場所：エペソ ヨハネはエルサレム教会の指導者であったが、その後エペソに住み、パトモス島に島流しになりました。

4. 執筆事情：ヨハネは、離散したユダヤ人及び改宗者に福音を伝える必要を覚え、本書を書いたと考えられます。同時に、本書の普遍的福音のメッセージは、すべての人に対して語られています。

5. 特色

①簡潔な文体：文体が簡潔でしかも美しく、ヨハネ独自のテーマやことばを用いています。1：1

②イエスの神性：イエスが受肉した神であることが強調されています。1：1、18、20：31、「わたしは～です」のイエスの7つの宣言と7つの奇跡も、イエスが神であることをあかししています。

③イエスの人性：当時、イエスは受肉していないと教える異端が広まっていたことも考慮し、イエスの人性も強調されています。1：14，4：6，7

④神学的解釈：共観福音書では、イエスの教えや働きを記録することを大切にしていますが、本書では、史実の神学的意味と解釈を強調しています。イエスの奇跡は、イエスの教えと組み合わせられて記されています。6：11，35，11：25，43，44

⑤ヨハネ独自の記事：共観福音書との共通記事が8%しかなく、エルサレムとその周辺を中心としたイエスの活動を記しています。また、エルサレムでの祭りやユダヤの習慣を重要視しています。7：37，38

⑥個人との対話形式：イエスとの個人的対話の記事が、多く記されています。ニコデモ3章、サマリヤの女4章、姦淫の女8章

6. 梗概

①序言 1：1～18

②イエスの伝道 1：19～12章

③弟子達への告別説教と祈り 13～17章

④受難と復活 18～21章

使徒の働き

1. 著者：ルカ

本書は、ルカの福音書と同じ著者ルカによって書かれました。1:1, 2 ルカはパウロの同労者として共に伝道し、ルカの福音書の後編として使徒の働きを書きました。

2. 執筆年代：61～64年頃 パウロがローマに到着してから2年後の時点から、パウロの殉教の間に書かれたと考えられます。

3. 執筆場所：ローマ ルカが、パウロと共にローマにいた間に書きました。

4. 執筆事情：本書が書かれた時には、すでに多くの教会が存在していました。そのような状況にあって、ルカは、教会の初期のことを知らない教会に、教会の起源について知らせる必要を覚えて、本書を書きました。

5. 特色

①初代教会の歴史：本書を通して、どのように教会が始まり成長していったかを知ることができます。イエスの弟子達に聖霊が降臨した時に、1:8のイエスの約束は成就し、教会がエルサレムから地の果てにまで建てられていった歴史を知ることができます。

②一般の歴史との関係：ルカは聖書以外の一般の歴史にも関心を示し、聖書の出来事を一般の歴史と関連させて述べています。その結果、当時の歴史的文献や資料から、かなり正確に聖書の出来事の年代を推定することができます。11:28, 13:7, 18:2

③聖霊の働き：使徒の働きは、聖霊が使徒達を用いて、神の計画を実行させた聖霊の働きを書いた書物でもあります。

<聖霊の働き>証しをする力を与える。1:8、信者に語り、用いる。8:29, 39、伝道地域を示す。16:6, 7、教会を牧させる。20:28、聖霊に満たされる。2:4, 4:8, 31

④伝道と教会形成：聖霊に満たされた弟子達は、大胆に福音を伝え、教会を建て上げ、教会を牧会しました。2:40-42、15章エルサレム会議

⑤福音書と書簡の架け橋：本書は、福音書におけるイエス・キリストの教えと書簡における使徒達の教えを結ぶ架け橋の役割を果たしています。

<信仰義認>ヨハネ 3:16、使徒 15:11、ガラテヤ 2:16

6. 梗概

①エルサレムにおける宣教 1～8章

ペンテコステ2章 29年

②ユダヤとサマリヤの全土における宣教 9～12章

パウロの回心9章 32年

③地の果てまでの宣教 13～28章

第1回伝道旅行13～14章 47年

エルサレム会議15章 49年

第2回伝道旅行16～18章 49年春～51年末

第3回伝道旅行19～21章 53年春～56年春

パウロのカイザリヤ滞在24～26章 56年夏～58年秋

パウロのローマへの旅27～28章 59年春～61年

ローマ人への手紙

1. 著者：パウロ(小さい) 1：1
2. 執筆年代：56年頃
3. 執筆場所：コリント
4. 宛先：ローマ パウロはこの時点で、まだローマに行ったことはありませんでしたが、ローマにはすでに教会があり、多くのクリスチャンがいました。ペンテコステの日にローマからエルサレムに來た人々が救われ、ローマに戻って伝道したことが考えられます。また、パウロの伝道によって救われた人々が、ローマに移り住んだことも考えられます。パウロはローマ教会の多くの人を、すでに知っていました。16章
5. 執筆事情：パウロは第3回伝道旅行の時、コリントを訪問しました。パウロは、かねてからローマで伝道したいとの願いを持っていましたが、今は諸教会からの献金を携えてエルサレムに行かなければなりませんでした。そんな時、ケンクレアの執事フィベがローマに行くことを聞き、この手紙を書いて彼女に託しました。ローマには世界中のあらゆる思想や宗教が入り込んでいました。そのような状況の中で、ローマのキリスト者が正しい信仰理解をもって、信仰者として成長するために、福音を体系的に教える必要をパウロは覚えて、この手紙を書きました。
6. 特色
 - ①教理を体系的に教える。手紙でありつつ、教理を体系的に教える論文としての性格があります。
 - ②人間の罪(1-2章)：人間の罪の本質を示し、異邦人もユダヤ人もすべての人は神の前に罪人であることを教えています。1：21-23、3：10
 - ③義認(3-5章)：人は律法の行いによっては、だれひとり神の前に義と認められることはなく、ただイエス・キリストを信じる信仰によって罪赦され、神の前に義と認められます。3：20-24
 - ④聖化(6-8章)：信仰によって義と認められ、救われたクリスチャンは、なお罪の性質を持っているため、罪とのきびしい戦いがあります。しかし、そのような者も、御霊の支配の中で日々きよめられ、圧倒的な勝利者になることができます。8：1、2、37
 - ⑤イスラエル人問題(9-11章)：パウロは同胞イスラエル人の救いを心から願いました。しかし、今彼らは不信仰になり、神の救いを拒んでいます。しかし、そのことによって救いは異邦人に宣べ伝えられ、すべての国民に神の祝福が及んでいます。けれども、イスラエルに対する神の計画は変わらず、やがて、イスラエルにも救いがもたらされ、こうして世界の救いが完成します。11：25-29
 - ⑥信仰の実践(12-15章)：福音の教理は信仰生活の土台であり、クリスチャンは教理を信仰によって實際生活に適用しながら、生きていくことが大切です。パウロは、教会生活、社会生活、人間関係について具体的に教えています。12：9-15

コリント人への手紙第 1

1. 著者：パウロ 1：1、16：21
2. 執筆年代：55～56年頃
3. 執筆場所：エペソ 16：8
4. 宛先：コリント コリントは、アカヤ州の首都であり、陸と海の交通の要所として商業が発達し、ローマ帝国第4の大都市でした。町の南側にそびえる山の頂にはアフロディト（愛の女神）の神殿があり、女神に仕える千人の巫女は神殿売春婦であり、多くの人と富を引きつけました。その結果、コリントは道徳的に腐敗し、「コリント人のように振る舞う」とは、不品行を行うことを意味したほどでした。パウロは第2次伝道旅行の時にコリントを訪れ、1年半伝道しました。使徒18：11その結果、多くの人々が信仰を持ち、コリントの教会が建てられました。
5. 執筆事情：パウロは、第3次伝道旅行でエペソに来た時、コリント教会における分派と不道徳の問題を聞き、手紙を送りましたが、余り効果はありませんでした。逆にパウロに反発し、パウロの使徒性を疑う者も現れました。5：9，9：1，2 また、コリント教会からパウロに、他の問題についても手紙で質問をしてきたため、パウロはこの手紙を書き、諸問題に対する聖書的な教えを伝えました。
6. 特色
 - ①具体的諸問題に対する答え この手紙は、この世において教会が直面する様々な問題を、問題の本質である人間の罪を指摘しながら、具体的に取り扱っています。3:1-3
 - ②分派の問題（1－4章）教会にアポロ派とパウロ派が起こり、対立していました。それに対しパウロは、成長させてくださる神だけが大切なのだと教えました。3:4-7
 - ③不道徳の問題（5－6章）コリントの町の影響を受けて、教会の中にも不品行を行う者がいました。パウロは、不品行を徹底的に教会から取り除き、避けるように、また、自分の体をもって神の栄光を現すように教えました。6:18-20
 - ④結婚の問題（7章）コリント教会は不品行の問題の結果、結婚、家庭のあり方で混乱していました。パウロは、不品行を避けるためにも、健全な結婚を勧め、神のみこころにそれぞれが従うようにと教えました。7:1,2
 - ⑤異教の問題（8－10章）偶像にささげた肉を食べて良いかという問題が、教会に起こりました。それに対し、大切なのは愛によって生きることであり、神の栄光を現すことだと教えました。8:13、10:31
 - ⑥礼拝の問題（11章）女性のかぶり物の問題では、礼拝においては秩序を守るようにと教え、主の晩餐については、その意味を覚え、主の晩餐を尊ぶようにと教えました。11:13、23-26
 - ⑦御霊の賜物（12－14章）御霊の賜物には多様性があり、それぞれが与えられた賜物と最も優れた賜物である愛を生かして、互いに仕え、共に成長することが大切だと教えました。12:4-7
 - ⑧復活の問題（15章）復活はないと主張する人に対し、復活の事実と意味を教え、勝利を宣言しました。15:19-22
 - ⑨結びのことば（16章）

コリント人への手紙第 2

1. 著者：パウロ 1：1、10：1
2. 執筆年代：56年頃
3. 執筆場所：マケドニヤ 7：5－7、8：1
4. 宛先：コリント
5. 執筆事情：パウロは、第2次伝道旅行の時、コリントに1年半とどまり伝道しました。その結果、多くの人が救われて、教会が建てられました。第3次伝道旅行でエペソに来た時、コリント教会における分派と不道德の問題を聞き、手紙を送りましたが、余り効果はありませんでした。そこで、パウロはコリント人への第1の手紙を書き、またテモテを遣わしました。その後、パウロ自らが、問題解決のためにコリントを短期間訪問しました。2：1, 12：14 しかし、教会の問題はなかなか解決せず、パウロに反発する者がなお多くいました。そこで、パウロは「涙の手紙」と呼ばれる手紙を書いて、テトスに託しました。2：4 パウロがエペソからマケドニヤに来た時、テトスがコリントの信者が悔い改めたとの朗報を持ってパウロの元に戻ってきました。パウロはそのことを知って大変喜び、その喜びの思いを伝えるためと、なお悔い改めない少数の者に悔い改めを勧めるために、この手紙を書きました。
6. 特色
 - ①パウロの個人的な思いがよく表されている手紙：苦難、慰め、望み、愛、不安、感謝喜びなど。1：6-7, 7：5-6
 - ②パウロの使徒としての弁明：パウロの使徒性を疑う者に対してのパウロの弁明が多く語られています。12：11, 12
 - ③使徒の務め（1－5章）：パウロは、困難の中にもキリストを宣べ伝え、人々に仕えるしもべとなり、神の栄光の現れを願う使徒として働きました。また、キリストの使節として、和解の福音を伝えました。4：5, 15, 5：20
 - ④使徒の勧め（6－7章）：パウロの涙の手紙は、コリントの信者に真の悔い改めをもたらしました。パウロはそのことを心から喜び、不信者の罪と分離するようにと勧めました。6：14, 7：10
 - ⑤献金の勧め（8－9章）：パウロは、マケドニヤの諸教会の模範例を挙げながら、困難の中にあるエルサレム教会への愛の献金を勧めました。ここで、献金とは単なる経済的な事柄だけでなく、霊的な事柄であり、神への感謝と恵みに満ちるものであることを教えました。9：6-8, 11-12
 - ⑥使徒の権威（10－13章）：コリントに偽教師がやって来て、パウロの使徒性を否定し、律法主義的な教えを伝えていました。パウロは彼らの誤りを指摘し、彼らにだまされないようにと注意を促しました。そして、自らの使徒としての権威を伝え、少数の悔い改めない信者に対し、悔い改めを勧めました。11：3-4, 13-14、13：2, 10
 - ⑦祝祷：この手紙の最後の三位一体の神の御名による祝祷は、今日、教会の礼拝で最も一般的に用いられています。13：13

ガラテヤ人への手紙

1. 著者：パウロ 1：1
2. 執筆年代：49年頃
3. 執筆場所：アンテオケ
4. 宛先：ガラテヤ
5. 執筆事情：本書のあて先については、北ガラテヤ説と南ガラテヤ説がありますが、ここでは南ガラテヤ説に沿って説明します。パウロは、第1次伝道旅行の際に、ガラテヤ地方で伝道し、ピシデヤのアンテオケ、イコニウム、ルステラ、テルベの諸教会が建てられました。パウロは伝道旅行の帰途、再び諸教会を訪問し、彼らを励ましてからアンテオケに帰りました。ところが、パウロがその地を去った後、ユダヤ主義者の偽教師が入ってきて、救われるためには割礼を受けなければならないと教え、ガラテヤの信徒達を惑わしました。さらに、彼らはパウロの使徒職の正当性についても攻撃しました。パウロは、これらの問題に対処するために、この手紙を書きました。また、エルサレム会議(使徒 15 章)において、ユダヤ主義者の教えの誤りについて教会全体で確認しました。

6. 特色

- ①パウロの使徒職の正当性(1－2章)：パウロは12弟子ではないこと、また、異邦人伝道に従事し、信仰義認の教えを伝えていることの理由で、パウロの使徒性についてユダヤ主義者から批判されました。これに対し、パウロは直接神によって使徒として召され、異邦人伝道に任命されたことを証しました。また、自らの信仰義認の体験についても記しました。

1：1， 2：8， 2：16

②信仰義認の教理(3－4章)：

- 1) 偽教師の教えによって、ガラテヤの信者たちに迷いが生じる中で、パウロは信仰義認の真理は、アブラハム自身が神から受けた祝福であることを教えました。3：6－9
- 2) 律法によっては神の前に義と認められるものは誰もいないことを教え、キリストが律法ののろいから贖い出してくださったことを教えました。3：11－13
- 3) 律法は人々をキリストに導く養育係であることを教え、キリストを信じる信仰によって、人は神の子とされると教えました。3：24－26

③信仰の実践(5－6章)：

- 1) 割礼を受けなければ救われないと教えたユダヤ主義者に対して、パウロは割礼を受ける必要はないこと、さらに、救いのために割礼を受ける者にとっては、キリストの恵みは何の益にもなっていないことを伝えました。5：2－5
- 2) キリスト者の自由を教えると共に、その自由を用いて人に仕えることを教えました。5：13
- 3) 御霊によって歩むことを勧め、肉の行いを捨て、御霊の実を結ぶようにと信者を励ましました。5：16, 22－23

エペソ人への手紙

1. 著者：パウロ 1：1
2. 執筆年代：61年頃
3. 執筆場所：ローマの獄中
4. 宛先：エペソ：エペソはアジア州の首都であり、ローマ帝国第3の都市として栄えました。また、町にはアルテミス神殿があり、宗教の中心地でもありました。パウロは、第3次伝道旅行において、約3年間エペソに滞在して伝道し、教会が建てられました。そして、第3次伝道旅行の帰りの時には、パウロはエペソの長老達をミレトに呼んで決別説教をしました。
5. 執筆事情：パウロがローマの獄中にいた時、アジアの諸教会で異端が起きました。パウロは、信者達が異端の教えに惑わされることなく、健全な教えを堅く保って信仰の成長をすることを願い、エペソの教会に手紙を書き、テキコに託しました。
6. 特色
 - ①獄中書簡：エペソ、ピリピ、コロサイ、ピレモンの4つの手紙は、獄中書簡と呼ばれます。パウロは、ユダヤ人指導者達に訴えられた時、カイザルに上訴したため、ローマに送られました。そして、2年間ローマ兵の監視の元で、家を借りて生活しました。その間、パウロは囚人として生活しましたが、パウロの弟子達は共に生活することが許され、また訪問者には伝道することもできました。その間にパウロは4つの手紙を書き、その後釈放されて伝道し、再び捕らえられて、IIテモテを書き、その後殉教しました。3：1
 - ②神の救いの計画（1章）：神は、神の民を永遠の救いの計画の中に選び、キリストの贖いにあずからせ、御国を受け継ぐ者とされました。1:4, 7, 11
 - ③キリストの奥義（1章）：神はキリストを死者の中からよみがえらせ、主権者とされました。そして、いっさいのかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。1:20-22
 - ④教会の奥義（2－3章）：教会はキリストのからだであり、神の家族、聖なる宮、神の御住まいです。キリストにあって、ユダヤ人も異邦人も同じ神の国民とされました。1:23, 2:19-22
 - ⑤教会の実生活的生活（4－6章）：
 - 1) キリストのからだである教会を建て上げるために、キリストは牧師また教師を立て、聖徒達を整えて奉仕の働きをさせ、こうして教会全体と聖徒1人1人が成長することを教えました。4:11-16
 - 2) キリスト者としての社会生活を教え、夫婦、親子、主人と奴隷との関係を、キリストとの関係の中で教えました。5:22, 25, 6:1, 4-5
 - ⑥キリスト者の霊的戦い（6章）：キリスト者の戦いは人間的なものではなく、悪魔と悪霊に対するものであることを教え、この戦いに勝つために、神の武具を身につけることを教えました。6:11-12

ピリピ人への手紙

1. 著者：パウロ 1：1
2. 執筆年代：61年頃
3. 執筆場所：ローマの獄中
4. 宛先：ピリピ。ピリピはアレクサンドロス大王の父、マケドニアのフィリップ王が建設した町です。BC42年、オクタ비아ヌス(後の皇帝アウグスト)はアントニウスと共に、ブルータス(カイザルを暗殺した人)とカシウスと戦い、ピリピで勝利しました。さらに、オクタ비아ヌスはアントニウスとクレオパトラにアクチウム海戦で勝利し、その勝利を記念して、ピリピをローマの植民都市としました。(使徒16:12) ピリピは軍事的にも通商的にも重要なマケドニア第1の地方都市でした。パウロは、第2次伝道旅行でピリピを訪れました。その時に紫布の商人ルデアとその家族、牢の看守とその家族が救われ、ヨーロッパ最初の教会が誕生しました。(使徒16章)
5. 執筆事情：ピリピ教会は、パウロにたびたび献金を送ってパウロを支える愛の教会でした。ピリピ教会はパウロがローマで捕らえられていると聞いた時、エパフロデトに献金を持たせてパウロの元に送りました。ところが、エパフロデトはローマに着いてから重病となり、ピリピ教会も大変心配しました。神の恵みによってエパフロデトの病気は直り、パウロは彼をピリピに送り帰すことにしました。そして、この手紙を書いてエパフロデトに託しました。
6. 特色
 - ①主にある喜びの強調：わずか4章の手紙の中に、16回「喜び」や「喜ぶ」という言葉が出てきます。主にある喜びは、状況や環境にかかわらず、信者に与えられる御霊の賜物です。4：4
 - ②キリストの謙卑と高揚：神であるキリストは、私達を救うためにへりくだって人となり、父なる神に従って十字架で死なれました。それ故、父なる神はキリストを高く上げ、「主」という「すべての名にまさる名」を与えられました。2:6-11
 - ③良き模範：テモテ、エパフロデト、パウロ自身という良い模範を挙げ、その模範に倣って生きるように勧めました。2:22, 25, 3:17
 - ④偽教師の教え：ピリピ教会に入ってくる異端やユダヤ主義者の教えに気を付け、キリストを信じる信仰に堅く立つように教えました。3:2, 3
 - ⑤教会内の不一致の問題に対する勧め：ユウオデアとセントケの対立に心を痛めたパウロは、主にあって一致するようにと勧めました。4:2, 3
 - ⑥ピリピ教会への感謝：ピリピ教会はたびたびパウロに献金を送り、パウロを支えました。パウロはこのことを心から感謝し、感謝の気持ちを表しました。ピリピ教会は多少の問題はあったとしても、愛と霊的祝福に満ちた教会でした。4:15-18

コロサイ人への手紙

1. 著者：パウロ 1：1、4：18
2. 執筆年代：61年頃
3. 執筆場所：ローマの獄中
4. 宛先：コロサイ：エペソから160km東に位置するフルギヤ地方の町で、近くにラオデキヤ、ヒエラポリスがあります。BC4、5世紀には政治、経済の中心都市でしたが、新約時代は衰退し、小さな地方都市となっていました。町には土着のフルギヤ人、ギリシャ人、ユダヤ人が住んでいました。パウロはコロサイでは直接伝道しませんでした、エペソで3年間伝道した時に、コロサイ教会の指導者エパfrasが救われ、彼の伝道によってコロサイに教会が建てられたと考えられています。ピレモンはコロサイ教会の信徒でした。
5. 執筆事情：コロサイ教会に3種類の異端の教えが入り込み、拡がり始めていました。エパfrasはこの問題をパウロに相談するために、ローマに行きました。ところが、エパfrasもローマで捕らえられたので(4:12)、パウロはこの手紙を書き、テキコに託しました。同時に、パウロはピレモンへの手紙を書き、オネシモをピレモンの元に送り返しました。
6. 特色
 - ①異端に対する教え：2章 異端の教えの誤りを指摘し、キリストだけが人を救うことができることを教えました。
 - 1)グノーシス主義（ギリシャ哲学の影響を受けた教え：哲学的知識によって真理を知ることができる。キリストは神よりも低い存在。霊は善、物質は悪との2元論を教える。）2：3、8-10
 - 2)ユダヤ主義（割礼や律法を重んじる。）2：16、17
 - 3)御使い礼拝、禁欲主義（土着宗教の影響）2：18、19
 - ②キリストの卓越性：1章 キリストこそ真の神、真の救い主であることを教えました。
 - 1)神としてのキリスト1：15、
 - 2)創造者としてのキリスト1：16、17
 - 3)救い主としてのキリスト1：18-20
 - ③キリストにある成長：3-4章 キリストと共に歩み続けることによって、信仰者として成長することを教えました。
 - 1)上にあるものを求める。3：1、2
 - 2)キリストの平和、キリストのことば、賛美、感謝にあふれる。3：15：16
 - 3)たゆみなく祈る。4：2-4

テサロニケ人への手紙第1

1. 著者：パウロ 1：1
2. 執筆年代：51年頃
3. 執筆場所：コリント
4. 宛先：テサロニケ：テサロニケはエーゲ海に面するマケドニア地方の港町で、マケドニア州の首都でした。東西交通の要衝として商業、貿易の中心地として栄えました。パウロは第2時伝道旅行の際、ピリピ伝道の後、テサロニケに来て伝道しました。（使徒17:1-4）その結果、幾人かのユダヤ人と多くのギリシャ人が信仰に入りました。ところが、ねたみにかられたユダヤ人が暴動を起こしたため、パウロの一行はテサロニケを去って、ベレヤに向かいました。
5. 執筆事情：パウロは、ベレヤからさらにアテネに行って伝道しました。けれども、テサロニケのことが気がかりになり、アテネからテモテをテサロニケに派遣しました。その間に、パウロはコリントに行き、そこでテサロニケから戻ってきたテモテと落ち合いました。パウロはテモテの報告を聞いて、テサロニケ教会を励ますためにこの手紙を書きました。
6. 特色
 - ①パウロとテサロニケ教会の交わり 1-3章
 - 1) 苦難と信仰：テサロニケの信徒は、信仰生活の最初から苦難に遭いますが、パウロの伝えた福音を信じ、すべての信者の模範となりました。1:6, 7 2:13, 14
 - 2) パウロの牧会：パウロは苦難の中にあるテサロニケ教会のために祈り、自らは行けなくてもテモテを送って励まし、手紙を送って教えました。3:1-3, 10
 - ②信仰の励まし 4-5章
 - 1) キリスト者の生活：聖い生活、兄弟愛、落ち着いた生活の大切さを教えました。4:3, 9, 11
 - 2) キリストの再臨：死者の復活とキリストの再臨についての正しい知識を教え、再臨を待ち望む正しい信仰生活を教えました。4:15-18
 - 3) キリスト者の生活：悪を避け、善を行い、喜び、祈り、感謝して歩むように教えました。5:16-22

テサロニケ人への手紙第2

1. 著者：パウロ 1：1
2. 執筆年代：51年頃 第1の手紙が書かれてから数ヶ月後
3. 執筆場所：コリント
4. 宛先：テサロニケ：テサロニケはエーゲ海に面するマケドニヤ地方の港町で、マケドニヤ州の首都でした。東西交通の要衝として商業、貿易の中心地として栄えました。パウロは第2時伝道旅行の際、ピリピ伝道の後、テサロニケに来て伝道しました。（使徒17:1-4）その結果、幾人かのユダヤ人と多くのギリシャ人が信仰に入りました。ところが、ねたみにかられたユダヤ人が暴動を起こしたため、パウロの一行はテサロニケを去って、ベレヤに向かいました。
5. 執筆事情：パウロが第1の手紙をテサロニケに書き送った後しばらくすると、その手紙で教えた主の再臨について、ある人達は誤解して受けとめているとの知らせが、パウロに伝えられました。ある者は主の日がすでに来たと考え、別の者は終末が近いと考えて落ち着かない生活を送っているというのです。そこで、パウロは彼らの誤解を正し、怠惰な人を戒め、さらに依然として続く迫害に耐える信徒を励ますために、第2の手紙を書きました。

6. 特色

①迫害に会う信徒への励まし 1章

パウロは、依然として続く迫害に耐えるテサロニケの信徒達を励まし、苦しみの意味を教え、神からの報いと迫害者に対する神のさばきを教えました。1：4－7

②主の日についての教え 2章

1) ある人達は主の日がすでに来たと考え、落ち着きのない生活をしていました。それに対し、パウロは、主の日は背教と不法の人の出現の後に来るのであって、だまされてはいけないと教えました。2:2, 3

2) 主を信じる者に与えられる救い、聖め、栄光の確かさを教え、みことばに堅く立つようにと励ましました。2:13-15

③祈りと勧め 3章

1) パウロは自分たちのために祈ってほしいと祈りを要請し、また、テサロニケの信徒のためにも祈りました。3:1, 5

2) 締めりのない生活をしている人に対して、仕事をし、経済的に自立して、落ち着いて生きるようにと教えました。3:11, 12

3) 教会戒規：使徒の教えに従わない者には、一時的に交わりを絶つことを教えました。その目的は、彼らが恥じ入り、悔い改めて立ち返るため、また、彼らに対する態度は、敵としてではなく、兄弟として戒めるようにと教えました。3:14, 15

テモテへの手紙第1

1. 著者：パウロ 1：1

2. 宛先：テモテ(エペソ教会で牧会中) 1：2

テモテの父はギリシヤ人、母はユダヤ人で、幼い時から信者の母と祖母から聖書を学んで育ちました。パウロが第2次伝道旅行でルステラに来た時、テモテはパウロの同労者となり、その後、パウロと共に伝道しました。また、パウロの使者として各地に派遣され、パウロがローマで監禁されている時も、パウロと共にいました。パウロは、61年頃、2年間の獄中生活から解放されて、伝道を再開し、その時、パウロはテモテをエペソ教会に派遣しました。

3. 執筆年代：63年頃 パウロがローマの獄中から釈放されて後に書かれた。

4. 執筆場所：マケドニヤ 1：3

5. 執筆事情：テモテが牧会するエペソ教会に偽教師が入り込み、偽りの教えに惑わされる人が出て来ました。パウロは、そのことに対する対処法と、それ以外の牧会上の大切な教えを伝えるために、この手紙を書きました。3:15 テモテⅠ、Ⅱ、テトスの3つの手紙を牧会書簡と言います。

6. 特色

①テモテへの命令 1章

パウロは、間違った教えに影響されるエペソ教会を牧会する「わが子」テモテに対し、自分の証しを織り交ぜながら、「この命令」を与えました。1:3-5, 15

②祈りと礼拝 2章

神はすべての人が救われることを望んでおられるとの神のみこころを示し、すべての人のために祈るようにと教えました。また、礼拝における男女の秩序を教えました。2:1-6

③教会役員の資格 3章

教会の監督と執事の資格について具体的に教え、ふさわしい人を選ぶようにと勧めました。3:1-4

④偽りの教えとそれに対する対処法 4章

さらに近づきつつある偽教師の危険性を伝え、牧会者としてどのように対処すべきかを伝えました。4:12-16

⑤牧会上の教え 5章

教会員への接し方、やもめや長老に対する牧会上の教えを伝えました。5:1-4

⑥牧会上の教え 6章

奴隷、偽教師、金銭、富んでいる人への牧会上の教えとテモテ自身への牧会者としての注意事項を教えました。6:9-12

テモテへの手紙第2

1. 著者：パウロ 1：1

2. 宛先：テモテ(エペソ教会で牧会中) 1：2

テモテの父はギリシヤ人、母はユダヤ人で、幼い時から信者の母と祖母から聖書を学んで育ちました。パウロが第2次伝道旅行でルステラに来た時、テモテはパウロの同労者となり、その後、パウロと共に伝道しました。また、パウロの使者として各地に派遣され、パウロのローマで1度目の獄中生活の時も、パウロと共にいました。パウロは、61年頃、2年間の獄中生活から解放されて、伝道を再開し、その時、パウロはテモテをエペソ教会に派遣しました。テモテはその後、エペソ教会の監督となり、ドミティアヌス帝の迫害の元で殉教したと伝えられています。

3. 執筆年代：65年頃

4. 執筆場所：ローマ ローマでの2度目の獄中生活の時に書かれた。

5. 執筆事情：パウロは1度目の獄中生活の後、再び伝道しました。そして、再び逮捕され、ローマに連行されて、2度目の獄中生活をしていました。今回は、1度目の獄中生活の時のような寛大な扱いはなく、パウロは犯罪人のようにつながれていました。2:9 1回目の裁判では、パウロを支持する者はなく、パウロは殉教の時が近いことを意識していました。4:16, 6-8 そんな中で、パウロはこの手紙を通してテモテを励まし、偽教師に対する警告を与えました。また、パウロはテモテにローマに来るようにと頼みました。それはテモテに会ってパウロ自身が励ましを受けたいため、また、トロアスに残してきた上着と書物を持ってきてほしかったためでした。4:11-13

6. 特色

①テモテへの励まし 1章

エペソで伝道するテモテは、困難な伝道牧会の中で、いつのまにか、主を証しすることに臆病になっていました。パウロはそのようなテモテに、彼の内に宿っている純粋な信仰と神の賜物を思い起こさせ、再び燃え立たせるようにと励ましました。1:5-8

②熟練した働き人 2章

パウロはテモテに、牧会者として具体的に何が必要で、どのように振る舞うべきかを教え、彼が熟練した働き人になるようにと励ましました。2:1-3, 15

③終りの日についての警告 3章

終りの日には、人々はますます不信仰になり堕落していくことを警告しました。そして、そのような中でも聖書に堅く立つようにと教えました。聖書こそ誤りない神のことばであり、人々を救いに導き、救われた人を十分に整えることができます。

3:1-5, 14-17

④テモテへの教えと依頼 4章

パウロはテモテに、みことばを宣べ伝える伝道者としての務めを、いつでも行うようにと励ましました。また、テモテにマルコを伴って、トロアスにある上着と書物を持ってきてほしいと依頼しました。4:1-5, 11-13

テトス

1. 著者：パウロ 1：1
2. 宛先：テトス 1：4 テトスはギリシヤ人で、パウロの伝道によって救われ、その後パウロの同労者として働きました。エルサレム会議では、テトスは割礼を受けない異邦人クリスチャンとして出席しました。ガラテヤ 2:3 テトスは、パウロの涙の手紙と第2の手紙をコリント教会に届け、コリント教会のために尽くしました。パウロがローマの獄中生活から釈放された後、テトスを連れてクレテ島で伝道し、テトスを牧会者として残しました。パウロはその後にも伝道を続け、トロアスで伝道している時に捕らえられ、ローマに連行されたと考えられています。Ⅰテモテ 4:13 テトスは、パウロの殉教前にダルマテヤに行き、伝道しました。Ⅱテモテ 4:10
3. 執筆年代：65年頃
4. 執筆場所：ニコポリ 3：12
5. 執筆事情：テトスが遣わされたクレテ教会は、組織的にもまだ整わず、教会員の生活も乱れ、偽教師の影響もありました。そこで、パウロはテトスを励まし、牧会と教会形成のついての具体的な指導を与えました。
6. 特色

①長老・監督の資質

パウロはテトスにクレテ教会に長老を任命するために、長老の資質を教えました。これらの資質は、教会を牧会する長老に必要な、霊的、実際の資質です。1:5-9

②偽教師への注意

クレテ教会にも偽教師が入り込み、大きな影響を及ぼしていました。この問題は、クレテ人の特質にも関係していました。パウロは偽教師の教えに惑わされる教会員の信仰を健全にするために、厳しく戒めるようにと教えました。1:10-14

③教会員各層に対する教え

老人達、年をとった婦人達、若い人達、テトス自身、奴隷に対して、健全な教えに従って生きるようにと教えました。2:1-3, 7, 8

④救いの目的

教会員に対する教えの根拠となる神の救いとその目的を教え、聖い敬虔な生活をするように教えました。2:11-14

⑤救いの根拠

私達は、自分の義の行いによるのではなく、聖霊による新生によって、内なる人が洗いよめられて救われました。それは、神の愛とあわれみによるものです。3:4, 5

⑥願いと勧め

パウロはテトスに、ニコポリにいる自分の所に来るようにと願いました。また、クレテの教会員には、怠け者にならず、正しい仕事に励むようにと教えました。3:12-14

ピレモン

1. 著者：パウロ 1
2. 宛先：ピレモン 1 ピレモンはパウロの伝道によって救われ(19)、パウロの同労者と呼ばれました。彼はコロサイに住み、自宅を開放して「家にある教会」を持っていました。彼は裕福であり、奴隷を持ち、オネシモも彼の奴隷の一人でした。彼はまた、信仰と愛にも富んでいる人でした。
3. 執筆年代：61年頃
4. 執筆場所：ローマの獄中 9 エペソ、ピリピ、コロサイと共に獄中書簡
5. 執筆事情：ピレモンの奴隷であるオネシモが、主人の家の物を盗んで、ローマに逃げてきました。ところが、ローマでオネシモはパウロと出会い、パウロに導かれて救われました。そして、オネシモは、しばらくパウロに仕える者となりました。パウロは、オネシモを自分の元にとどめておきたいとも願いましたが、ピレモンの元に返さなければならないと考えました。当時は、主人の物を盗んだ奴隷は、罰として殺されることが常でした。そこでパウロは、ピレモンにこの手紙を書いて、オネシモを主にある愛する兄弟として赦し、受け入れてほしいと頼みました。そして、テトスにこの手紙とコロサイ人への手紙、そしてオネシモを託してピレモンの元に送り届けました。

6. 特色

①ピレモンの信仰と愛

パウロの同労者と呼ばれる信徒ピレモンは、自宅を開放して、コロサイの家の教会のために奉仕をしました。ピレモンは、主イエスに対する信仰とすべての聖徒達に対する愛をもって、主に仕える人物でした。4-7

②最も個人的な手紙：この手紙は、パウロがオネシモのことでピレモンに書いた、聖書の中でも最も個人的な手紙です。パウロは愛をもって、一人の人オネシモのために心を砕いてとりなしました。8-10

③神の摂理：オネシモは、ローマまで逃げれば捕らわれないと考えましたが、ローマでパウロと出会い、神に捕らえられました。しかも、パウロはオネシモの主人ピレモンを救いに導いた人でした。この書を通して、神のすばらしい導きと摂理を知ることができます。17

④神の救いのすばらしさ：オネシモ(有益の意味)は、以前は役に立たない者でしたが、キリストによって救われた時、役に立つ者に変えられました。それは、キリストによって新しく造られた者となったからです。(Ⅱコリント 5:17) 私達もキリストに救われて、神にとって役に立つ者とされていることを感謝しましょう。11, 12

⑤赦しと和解：パウロは、オネシモをピレモンの元に返し、オネシモはピレモンに謝らなければならないと考えました。他方、ピレモンには、この世の主人と奴隷の関係で、オネシモを罰するのではなく、主にある愛する兄弟として、赦し受け入れるようにと伝えました。ここに、この世の奴隷制度を越えた、教会の交わりの姿が現わされています。13-16

⑥パウロの愛：パウロはオネシモに代わって負債を支払うと申し出て、オネシモを許してほしいとピレモンに願いました。このパウロの愛に、私達の罪を赦すために、キリストがご自分のいのちをもって、私達の罪の負債を支払ってくださった神の愛と贖いが現わされています。18-20

へブル

1. 著者：不明 「本当のことは神だけが知っている」
2. 宛先：不明 読者はユダヤ人クリスチャン ローマの可能性
3. 執筆年代：65－69年頃 パウロの殉教後、皇帝ネロの死の間
4. 執筆場所：不明 イタリア以外の場所 13:24 エルサレムの可能性
5. 執筆事情：この手紙の宛先のユダヤ人信者は、最初は信仰の確信を保ち(3:14)、聖徒達に仕え(6:10)、迫害を耐え忍んでいました。(10:32) しかし、彼らの中には、信仰の未熟な者もあり(5:12)、その人達がやがて確信と希望を失い、集会に集うことをやめ(10:23-25)、迫害に耐えられず、ユダヤ教に逆戻りする者も出てきました。著者は、このような状況にある読者の信仰を励ますために、この手紙を書きました。

6. 特色

①キリストの人格の優越性 1-4 章

御子の啓示、創造、神の本質の完全な現れ、罪の聖め、神の右の座への着座を教え、キリストが、御使いや他の預言者に比べて、はるかにすぐれたお方であることを教えました。1:1-4

②キリストの大祭司としての優越性 5-7 章

イエスは罪は犯されませんでした。私達と同じように試みを受けた、私達の弱さに同情できる大祭司です。また、レビ系祭司、アロンによる大祭司よりもはるかに優れたメルキゼデクの位に等しい大祭司となりました。だから、私達は、大祭司イエスを通して、神のみもとに大胆に近づくことができます。4:14-16、5:7-10

③キリスト者の成長

信仰の未熟な者に対して、初歩の教えに留まることなく、或いはユダヤ教に逆戻りすることなく、堅い食物を食べて、成熟を目指して進もうと励ましました。5:12-6:2

④キリストの贖罪の優越性 8-10 章

キリストは、旧約の聖所、動物の犠牲、アロンによる大祭司よりもはるかに優れ、ご自分の血をもって完全な贖いを成し遂げられました。9:11-15

⑤信仰の励まし

信仰が弱り、確信と希望が薄れ、集会を集うことをやめてしまった信者に対して、キリストにある希望を告白し、互いに勧め合い、励まし合い、集会出席を大切にするようにと教えました。10:22-25

⑥信仰の教え 11-13 章

信仰とは何かを、旧約の聖徒達の生き方を通して教え、忍耐をもって、信仰によって歩むようにと教えました。11:1-2、12:1-2

⑦信仰の訓練

迫害や試練や困難を主からの訓練と思って耐え忍び、弱り果てることがないようにと励ましました。12:3-7

ヤコブ

1. 著者：主の兄弟ヤコブ 1：1 主の兄弟ヤコブは、最初はイエスを信じなかったが、後にはイエスを信じ、エルサレム教会の指導者となった人。使徒 15:13
2. 宛先：国外に散らばっているユダヤ人キリスト者 1：1
3. 執筆年代：48年前後
4. 執筆場所：エルサレム
5. 執筆事情：国外に散らばっていたユダヤ人キリスト者は、個人生活においても教会生活においても、様々な問題をかかえていました。この問題の根底には、彼らが、自分が信じている信仰の通りに、生活していないことにありました。信仰が生活の中で実践されない結果、信仰の試練や罪の誘惑に負け、この世を愛する生活に陥っていました。ヤコブはこの誤りを正し、行いのない信仰のむなしさを教え、信仰の通りに生きるようにと教えるために、この手紙を書きました。ヤコブ、ペテロⅠ、Ⅱ、ヨハネⅠ、Ⅱ、Ⅲ、ユダまでを公同書簡と呼びます。これらの手紙は、ヨハネⅡ、Ⅲを例外として、特定の教会や個人宛の手紙ではなく、信者全体を対象として手紙なので、公同教会に宛てた手紙、公同書簡と呼ばれるようになりました。

6. 特色

①試練と忍耐

信仰が試される様々な試練に会うキリスト者に対し、試練に負けることなく、むしろ、それを喜びとし、試練から生じる忍耐を働かせるようにと励まします。試練を通して、キリスト者は信仰の成熟を得ることができるからです。1:2-4

②みことばの実行

本当の信仰は、みことばをただ聞くだけでなく、実行することにあると教え、みことばから離れず、みことばを実行するようにと励ましました。みことばを実行する者に神の祝福が与えられます。1:22-25

③行いのない信仰のむなしさ

ヤコブの行いによる義の教えは、パウロの信仰義認の教えと矛盾するのではとの疑問が生じるかもしれませんが、しかし、パウロは信仰の根本的な面を強調したのに対し、ヤコブは信仰の結果的な面を強調したのであって、両者の教えには何の矛盾もありません。真の信仰は良い行いの実を結びます。2:20-26

④舌を制する者

ヤコブは、行いの中にはことばが含まれていると言います。行いのない信仰はむなしといは、ことばにおいても言えることであり、正しいことばを適切に語ることが、キリスト者の目標であると教えます。1:19, 26, 2:12, 3:2, 4:11

⑤神を愛し、神の友となる

世を愛し、世の友となり、自分の快樂を求めて生きる者に対して、そのような生き方は、神を敵として生きることだと教えました。そして、むしろ神を愛し、神の友となって神に従って生きるようにと教えました。4:4-7

⑥信仰による祈り

キリスト者は、どんな逆境にも全能の神に信頼して、祈るようにと教えます。互いのために祈ることを通して、神は、肉体的にも霊的にも、いやしを与えられます。キリスト者の祈りには、大きな力があります。5:13-16

I ペテロ

1. 著者：ペテロ 1：1
2. 宛先：ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ビテニヤに住む信者 1：1
3. 執筆年代：63年頃、皇帝ネロの迫害（64-68年）以前
4. 執筆場所：ローマ 5：13 バビロンは象徴的にローマを意味する。
5. 執筆事情：この手紙の読者は、信仰の故に脅かし（3：14）、悪口（4：4）、非難（4：14）を受ける試練の中にいました。彼らの中には、試練の中で心が動揺し（3：14）、驚き怪しみ（4：12）、思い煩う者もいました。（5：7）そこでペテロは、試練の中にある彼らを励まし、彼らが堅く信仰に立つことができるために、この手紙を書きました。

6. 特色

①信仰の試練

キリスト者は、キリストを信じる信仰によって救われた結果、大いに喜んでいます。と同時に、地上にあってはしばらくの間、試練の故に悲しみも経験しなければなりません。しかし、信仰の試練を通して、私達の信仰は純粋なものとなるのであり、試練は私達にとって尊いものなのです。1：5-9

②みことばによる成長

神のことばによって救われたキリスト者は、悪を捨て、生まれたばかりの乳飲み子のように、日毎にみことばの乳を慕い求める必要があります。私達は、みことばによって救いの完成の日まで成長することができます。1：23-2：2

③教会の交わりの中での成長

キリスト者は、霊の家である教会の交わりの中に築き上げられることによって、成長することができます。そして、神の民としての働きを、この世に対して十分に行うことができるのです。2：4, 5, 9, 10

④キリストの模範

キリスト者は、キリストの苦難によって救われました。ですから、苦難を忍ばれたキリストの模範に従って、苦しみを耐え忍び、罪から離れ、義のために生きるようにと励ましました。2：20-25

⑤弁明の用意

義のために苦しむことは幸いなことであると教え、いつでも信仰の希望について弁明する用意をし、証しの機会を十分用いるようにと励ましました。3：14-17

⑥堅く信仰に立つ

試練に会う時には、思い煩いを主にゆだね、堅く信仰に立ち、悪魔に立ち向かうようにと励ましました。試練の時には悪魔が働きますが、同時に神も働き、試練を訓練の時として用いて、私達の信仰を完成させてくださいます。5：7-11

Ⅱ ペテロ

1. 著者：ペテロ 1：1
2. 宛先：第1の手紙と同じと考えられる。3：1 ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ビテニヤに住む信者
3. 執筆年代：66年頃、皇帝ネロの迫害（64-68年）によるペテロ殉教の少し前
4. 執筆場所：ローマと考えられる。
5. 執筆事情：この手紙の読者の教会に、偽教師による異端の教えが入り込み、少なからぬ影響が出てきました。そこでペテロは、異端の教えに対する警告と、キリスト者の確かな信仰と生活について教えるために、この手紙を書きました。また、ペテロは自分の殉教が間近なことを覚え、自分が去った後も、正しい信仰を思い起こさせるためにこの手紙を書きました。1:14, 15

6. 特色

①信仰と生活

良い行いを否定する異端の教えが入ってくる中で、キリスト者は信仰の土台の上に、良い行いを加えることが必要だと教えました。信仰と生活が結びつく時に、私達は神のために役に立つ者、実を結ぶ者になることができます。1：5-10

②聖書の解釈

偽教師は、聖書を私的解釈して、間違った教えを教えていました。しかし、聖書は自分勝手に解釈すべきでなく、聖霊によって解釈すべきです。私達は、聖書の著者を動かした聖霊によって聖書を読む時に、神のみこころを正しく知ることができます。

1:19-21

③偽教師の教え

イスラエルの中に偽預言者が出たように、教会の中にも偽教師が現れます。彼らは滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、主の贖いを否定します。ことばにおいても行いにおいても主を否定する彼らの教えに気を付けるようにと教えました。2:1-3

④主の再臨

主の再臨を否定する偽教師の誤りを指摘し、主の日は突然やって来ること、しかし今は、主はすべての人が悔い改めることを望んで、忍耐しておられることを教えました。

3:8-10

⑤聖い敬虔な生き方

主の再臨によって万物が滅びることを知る時、キリスト者はますます聖い敬虔な生き方をすべきことを教えました。聖い敬虔な生き方は、ことばによる伝道と共に、この世にあって主の福音をあかしし、主の再臨を待ち望む生き方となります。3：11-14、マタイ 24:14

I ヨハネ

1. 著者：ヨハネ 古代教父(イレナエウス、テルトゥリアヌス)の証言とヨハネの福音書と共通することばや文体から、著者はヨハネと考えられている。
2. 宛先：エペソを中心とする小アジア(現トルコ)の諸教会に宛てたと考えられる。
3. 執筆年代：80年後半～90年前半頃、福音書より後、黙示録より前に書かれた。
4. 執筆場所：エペソと考えられる。ヨハネは晩年エペソに住んでいた。
5. 執筆事情：この手紙の宛先の教会に、異端の教えが入ってきました。その教えは、グノーシス主義(特別な知識=グノーシスとは知識の意味=を持つことによって救われると説く)の影響を受け、^{かげんろん}仮現論(キリストは人間であるように見えたに過ぎず、実際は肉体を取らなかったと説く)に基づいていました。また、異端の信者は道徳的にも間違った生活をしていました。ヨハネは異端の教えと偽教師達に対して警告を与え、正しい福音の教理と信仰生活を教えるために、この手紙を書きました。

6. 特色

①イエスの証し

ヨハネが実際に聞いて、見て、触ったイエスは、神が人となられた救い主です。イエスはいのちのそのものであり、私達に永遠のいのちを与えてくださる救い主です。永遠のいのちをいただいた私達は、御父及び御子との交わりを持ち、教会の交わりの中に入れられました。この交わりの中に私達の喜びがあります。1:1-4

②罪の赦しときよめ

イエスは私達の罪のためのなだめの供え物となって、十字架で死に贖いを成し遂げてくださいました。ですから、私達が罪を悔い改めてイエスを主と信じるなら、すべての罪が赦されて、きよめられるのです。1:7-2:2

③異端への警告

イエスがキリストであることを否定し、またキリストの受肉も否定する異端の誤りを指摘し、反キリストの霊に対して気を付けるように警告を与えました。2:22-23, 4:1-3

④神の愛に応答して生きる

神の愛は、キリストの身代わりの死を通して、私達にはっきりと現わされました。この神の愛を知った私達は、兄弟を愛することによって、神の愛に応答して生きることができます。3:16-18, 4:7-11

⑤世に勝つ者

イエスを神の御子と信じる者は、その信仰によって世に勝つ者となりました。私達は、イエスを信じる信仰によって、神を愛し、神に従う者となり、その結果、隣人を愛する者とされました。5:3-5

⑥祈りの確信

御子を信じ、永遠のいのちを持つ者は、祈りの確信が与えられます。その確信とは何事でも神のみこころにかなう祈りは聞かれるというものです。神のみこころこそ最善の答えです。5:12-15

Ⅱ ヨハネ

1. 著者：ヨハネ 古代教父の証言とヨハネの福音書、Ⅰヨハネ、Ⅲヨハネと共通することばや文体から、著者はヨハネと考えられている。
2. 宛先：選ばれた夫人とその子供達 個人と考えることもできるが、教会を意味しているとも考えられる。教会ととれば、Ⅰヨハネを送ったエペソを中心とする小アジア(現トルコ)の諸教会と考えられる。
3. 執筆年代：80年後半～90年前半頃、Ⅰヨハネより少し後に書かれた。
4. 執筆場所：エペソと考えられる。ヨハネは晩年エペソに住んでいた。
5. 執筆事情：この手紙の宛先の教会に、異端の教えが入ってきました。その教えは、グノーシス主義(特別な知識＝グノーシスとは知識の意味＝を持つことによって救われると説く)の影響を受け、仮現論(キリストは人間であるように見えたに過ぎず、実際は肉体を取らなかったと説く)に基づいていました。また、異端の信者は道徳的にも間違った生活をしていました。ヨハネは第1の手紙で、異端の教えと偽教師達に対して警告を与え、正しい福音の教理と信仰生活を教えました。しかし、さらに、異端に対して警告を与える必要を覚えてこの手紙を書きました。

6. 特色

①愛と真理 1－3

主にある者が愛し合う愛の基礎は、「私達のうちに宿る真理」にあります。真理は、イエス・キリストご自身であり、またキリストを通して神が啓示された教えでもあります。この真理と愛のうちにある時、私達は神とキリストから来る恵みとあわれみと平安を受ける者となりました。

②真理のうちに歩む 4

真理のうちに歩むとは、ただ真理を信じるだけでなく、実際に真理に従ってそれを行う生活をする事です。ヨハネは真理のうちに歩む人達を非常に喜びましたが、神もそのような人達を非常に喜ばれます。

③愛のうちに歩む 5－6

神の命令は、私達が互いに愛し合うことであり、愛のうちに歩むことです。また、神を愛するとは、神の命令に従って歩むことです。神を愛することと隣人を愛することは、矛盾しません。互いに愛し合う教会の交わりは、異端の攻撃に対する防備となります。

④反キリストの教え 7－9

異端の教えは、キリストの受肉を否定し、正しい福音の教えにとどまらず、行き過ぎていました。そのような教えを伝える者は反キリストです。キリスト者は、キリストのうちにとどまり、また、キリストの教えのうちにとどまります。

⑤偽教師への対応 10－11

キリスト者の愛の交わりの行為の一つに旅人をもてなすことがありました。しかし、偽教師を家に受け入れてはいけないし、主にあるあいさつをして交わりをもってもいけません。そのような行為は、異端の活動を援助することであり、悪い行いを共にすることになるからです。

⑥顔を合わせて語る 12－13

ヨハネは手紙で重要なことを教えつつ、他のことは顔を合わせて語りたいと願いました。顔を合わせて語り合う時、私達の喜びは全きものとなります。

Ⅲ ヨハネ

1. 著者：ヨハネ ヨハネの福音書、Ⅰヨハネ、Ⅱヨハネと共通することばや文体から、著者はヨハネと考えられている。
2. 宛先：ガイオ ガイオは当時の一般的な名前であり、人物を特定することはできない。彼は教会の指導的立場にある信徒であったと考えられる。
3. 執筆年代：80年後半～90年前半頃、Ⅰヨハネ、Ⅱヨハネとほぼ同時期に書かれた。
4. 執筆場所：エペソと考えられる。ヨハネは晩年エペソに住んでいた。
5. 執筆事情：ヨハネは何人かの巡回伝道者を送り出し、彼らがヨハネの元に帰ってきた時に、伝道の報告を受けました。彼らは、ガイオから受けた愛のもてなしを伝えると共に、彼らの言うことを聞き入れないデオテレペスについて報告しました。ヨハネはその報告を受けて、ガイオの愛と真実な行いをほめると共に、デオテレペスを見ならわないようにとの注意を与えるために、この手紙を書きました。

6. 特色

①主にある愛 1、2

ヨハネは、ガイオのことを主にあって本当に愛していました。その愛は、彼への呼びかけのことばと共に(1, 2, 5, 11)、彼への祈りにおいて現わされています。キリスト者にとってたましいの幸いが第1であると共に、すべての点での幸いと健康を祈ることは大切なことです。

②真理に歩む 3、4

ガイオがたましいに幸いを得ていることは、彼が真理に歩んでいることによってわかります。彼は真理なるイエスとイエスの真理の教えを受け入れると共に、真理に従って生活していました。歩むことは前進、成長をも意味しました。ヨハネは真理に歩むガイオを大変喜びました。

③愛の行い 5－8

ヨハネは巡回伝道者をもてなすガイオをほめました。ガイオは真理に生きると共に愛に生きる信徒でした。ヨハネは、巡回伝道者をもてなすべき理由を3つ挙げました。1) 彼らは御名のために出て行った。2) 彼らは異邦人からは何も受けていない。3) 真理のために彼らの同労者となれる。

④デオテレペスに対する注意 9－11

ガイオの教会にはデオテレペスという人がいました。彼はヨハネから送られた巡回伝道者の教えを受け入れず、彼らをののしり、自分が教会のかしらになろうとしました。さらに、巡回伝道者を受け入れようとする人々の邪魔をし、教会から追い出そうとしました。ヨハネは彼の悪を見ならわないで、善を見ならうようにとガイオを励ましました。

⑤デメテリオの推薦 12

デメテリオはこの手紙をガイオの元に送り届けた人物を考えられます。彼は、みなの人、真理そのもの、ヨハネ達から証言によって推薦されました。彼も真理に歩み、良き証しを立てていた人でした。

⑥平安の挨拶 13－15

ヨハネはガイオに平安を祈りました。平安・平和は神がくださる御霊の賜物であり、神との平和、人との平和、心の平安を意味します。私達もお互いに平安を祈り合う者となりましょう。

ユダ

1. 著者：ユダ ヤコブの兄弟ユダはイエスの兄弟。
2. 宛先：ヤコブを知るユダヤのキリスト者とさらに広い地域に住むキリスト者
3. 執筆年代：70 年～80 年頃
4. 執筆場所：不明
5. 執筆事情：ユダは最初、救いについての体系的な教えを書こうとしました。しかし、異端が教会に入り込み、その影響が大きかったため、異端に対する警告を与え、福音の真理を守るためにこの手紙を書きました。この異端はⅡペテロで記されているものとよく似ているため、手紙の内容にも類似点があります。
6. 特色

①偽教師の出現

様々な地域の初代教会に偽教師がひそかに入り込んできました。そこで、「聖徒にひとたび伝えられた信仰」のために戦うようと、ユダは勧めの手紙を書きました。偽教師達は、神の恵みを否定し、肉の欲のままに歩み、イエス・キリストを否定する人達でした。彼らの教えから教会を守るためには、信仰の戦いが必要です。3, 4

②偽教師の特徴 1

彼らは不道徳を行い、神を否定し、信者の中に入り込んで教会の交わりを汚し、自分達の利益だけを求めます。また、つぶやき、不平を鳴らし、大きなことを言って人を惑わします。しかし、彼らの教えは、風が吹けば一瞬のうちに吹き飛んでしまう偽りの教えです。8, 12, 16

③偽教師の特徴 2

彼らが世に来ることは前もって知らされていました。彼らは御霊を持たず、生まれつきのままの人間です。だから、依然として罪の中を歩み、キリストのからだなる教会に属さず、教会に分裂を起こします。17－19

④キリスト者の信仰の戦い

ユダは次のことをもって、異端との信仰の戦いに勝利するようにと勧めました。1) 自分の持っている信仰を守り、その信仰の上に自分自身を築き上げる。2) 聖霊によって祈る。3) 神の愛の内に自分を保ち、神の戒めを守る。4) 主イエスの再臨を待ち望む。5) 偽教師の惑わしに迷わされている人達をあわれみ、救出する。6) 自らが罪に陥らないように、神を恐れて罪を憎む。20－23

⑤キリスト者を守る神

神は私たちが信仰のつまずきから守ってくださるお方なので、このお方により頼むことが大切です。また、神は私たちが信仰義認によって罪のない者として御前に立たせてくださいます。この救いの喜びをもって主をあがめ、主をほめたたえる者となりましょう。24, 25

ヨハネの黙示録

1. 著者：ヨハネ 1:1, 2, 4, 9
2. 宛先：アジアにある 7 つの教会 1:4, 11 7 が完全数であり、これら 7 つの教会の状況は、全教会に共通する問題であるので、すべての教会に宛てて書かれたと考えられる。
3. 執筆年代：90 年代頃 ドミティアヌス帝の厳しい迫害時に書かれたと考えられる。
4. 執筆場所：パトモス島(エペソの西 100 km) 1:9 ヨハネが島流しの刑にあった時。
5. 執筆事情：ネロ帝の迫害は局地的なものでしたが、ドミティアヌス帝の迫害はローマ帝国の広範囲に渡る厳しいものであり、キリスト者は迫害の苦難の中にありました。他方、当時の教会は、初期の使徒達の宣教の時と比べると、霊的に衰退している状況もありました。このような教会に対して、神は悔い改めて信仰の原点に立ち返ると共に、救いの完成を待ち望み、希望と忍耐をもって信仰の勝利を勝ち取るよう励ますために、ヨハネに対し、終末の啓示を与えられました。

6. 特色

①象徴的用語や数字の使用

黙示録は象徴的用語や数字を多く用いています。その中のあるものは意味が説明されていますが、多くのものは読者が解釈しなければならず、難解な書物です。1:20, 4:5

②終末と新天新地の啓示

患難時代(4～18 章)、キリストの再臨(19 章)、千年王国、最後の審判(20 章)、新天新地(21, 22 章)などの終末論を、象徴的な表現を多く用いつつも終末について詳細に記しています。4:1

3. キリストの中心性

黙示録の中心にはキリストがおられます。キリストこそ教会の主、世をさばかれるお方、天の礼拝においてあがめられるお方です。5:4, 5, 12

4. 内容

1) 7 つの教会への使信 1—3 章

7 つの教会に賞賛、悔い改め、約束が語られています。2:4, 5

2) 7 つの封印と 7 つのラッパによるさばき 6—11 章

7 つの封印が解かれると 7 つのラッパが鳴らされ、神のさばきが行われて万物は患難時代を迎えます。6:1—4

3) キリストの再臨、千年王国、最後の審判 19—20 章

患難時代の後にキリストが再臨され、その後に千年王国を迎えます。その後、最後の審判が行われます。20:11—15

4) 新天新地 21—22 章

最後の審判の後、神の救いは完成し、新天新地が訪れます。都の中心には神と子羊がいて、神の栄光に満ち、救われた者は永遠の祝福にあずかります。21:1—4